ISSN 1345-0379

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY
宮城県図書館だより

1999.11
第３号

ことばのうみ

kotoba-no-umi

贅沢な孤独

小池 真理子

十代の多感な時期、仙台で高校生活と浪人生活を送った。人と一緒にいる時間よりも、独りで過ごす時間が好きな、ひねくれたところのある少女だった。

わけもなくひりひりした神経をなだめるために、独りで何か考え、ぼんやりし、本を読み、自意識過剰のつまらない散文をノートに書きつける。そんなことをするためにも、図書館はうってつけだった。

自分の足音が館内に谺するような、大学構内にある石造りの静かな図書館に、時々足を運んだ。受験勉強をする、という目的があったことなどすぐに忘れ、秋の日の夕暮れ、窓の外が暗くなるまで小説を読み耽っていたりした。

それにしても日暮れてから独り、ノートや本など小脇に抱えて図書館を出た時に感じる、あの何とも言えない贅沢な孤独感は何なのだろう。今は図書館を利用することが少なくなってしまったが、行けば必ず、あの頃と同じ感覚が甦る。不思議である。

（こいけ・まりこ　作家）